

基礎学力向上に関する研究会

～教育力の進化～

関西大学の取り組み

「三者協働型アクティブラーニングの展開」

三浦 真琴

門の一歩手前で...
門をくぐって一歩前へ

パラダイムシフト

➤「教員観」

➤「教員中心主義」から「学生中心主義へ」

➤勉強する「学習観」その変遷

➤“How to Teach”から“How to Learn”へ

➤「教育観」

チャンスを手にするために

- 教師の願いをより確かに学生に伝えたい
- 教師の「何か」を変えたい
- それを学生を変える「何か」につなげたい

しかけ 伝える「装置」

- 教師の願いを「誰か」の「声」に託してみる
- 教師の思いを「誰か」の「行動」に反映させてみる
- 教師の望みを「誰か」の「姿勢」にゆだねてみる

学生の「ちから」に注目

- 発声の内容と分量を変える
- 見せる背中も変えて(換えて)みる
- 見せる「何か」が変わってくる
- 見せない「何か」が生まれてくる

Active Learning の実現に向けて

- PBL型の授業を徐々に展開したい
- 学生の参加を促す「ちから」がほしい
- その「ちから」は「上」から降りてくるのではなく
「下」「横」から湧いてくるものであってほしい

既にある経験・環境・智慧を活かす

➤ 授業支援SA

→ 学習支援に特化したLAへ

➤ 「スタディスキルゼミ」

→ 科目内容を細分化

LA (Learning Assistant) という発想

主に初年次学生を対象とした科目(群)において

「知識の転移」という教師中心の発想から脱した

「知的プロセス」の想像的・創造的体験を核とする

授業(学習機会)をわかりやすい「かたち」で

展開するために必要な人材

スタディスキル科目の展開

2009年 : 「スタディスキルを身につける」(1科目)

2010年 : 「スタディスキルゼミ」

テーマ別に展開＝科目数増加 : 6科目へ
受講対象の拡大 : 学年不問

2011年 : テーマ増(6科目→7科目)

年度	2008年	2009年	2010年	2011年
履修者	437名	663名	701名	1087名
希望者	—	—	1042名	2274名

テーマ	レベル
ノートをまとめる	基礎的なレベル
パソコンで学ぶ	
新聞で学ぶ	
レポートを作成する	導入教育として 中核的なレベル
プレゼンテーション	
課題探求	応用的なレベル
ディベート	

LAが活動するその他の科目

■ 大学教育論

グループワーク形式で展開する全学共通科目(多人数授業)

■ 関西大学ピア・コミュニティ入門&演習

「ピア・コミュニティ」で活動する学生スタッフ「ピア・サポータ」
(及び志望者)を対象とする全学共通科目

■ 「文章力をみがく」・「論理的に考える」

一部のクラスでグループワーク形式の授業を実施

LAの発掘・発見



授業支援SA

授業支援ステーション事務職員が推薦

受講生

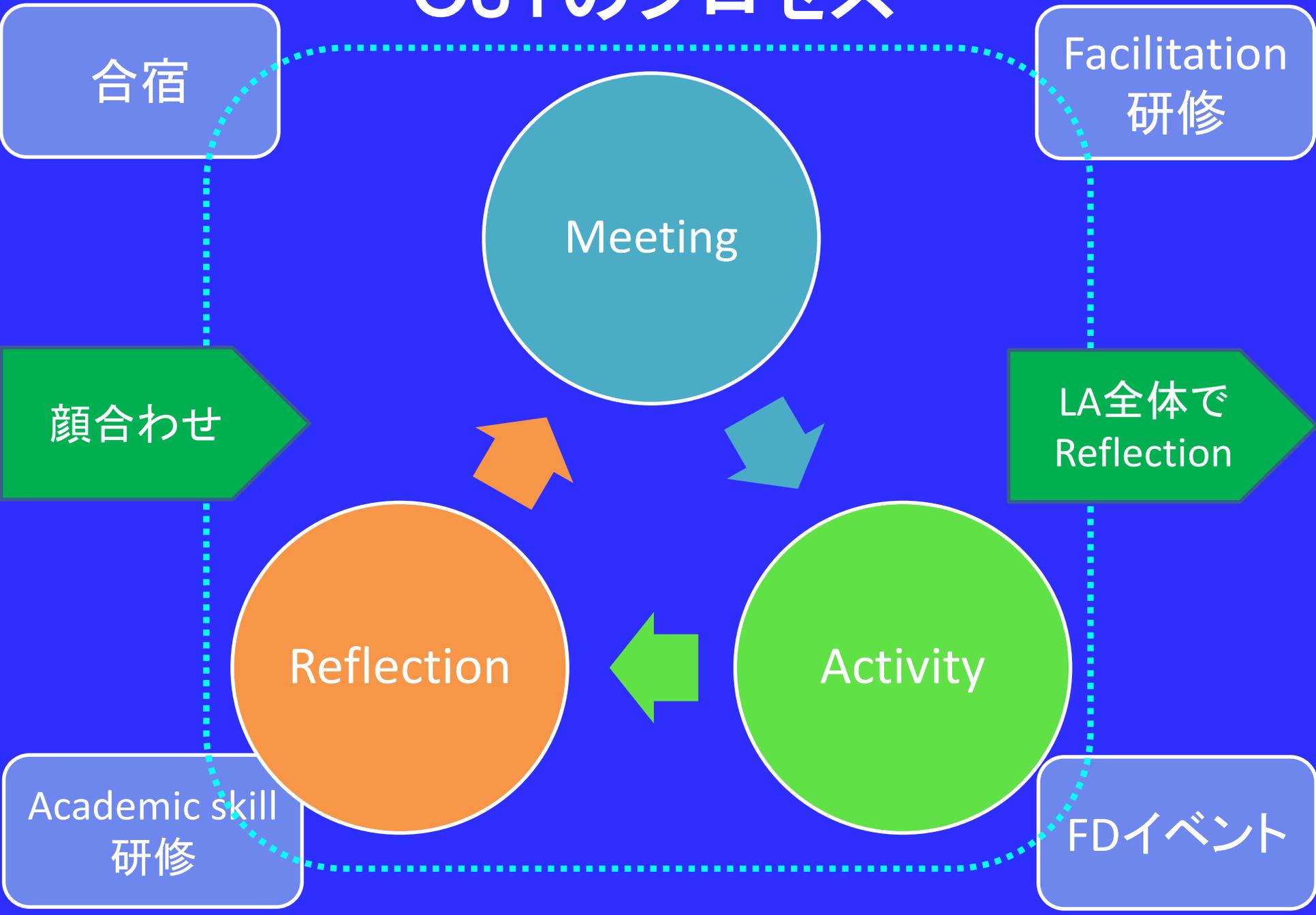
受講生の中から担当教員が推薦 他

教員A: 授業へのコミットメントが高いこと /
GWにおける他メンバーへの気配り

教員B: 分析的な視点から自らの気づきを文字化できる /
授業を通じて成長が見られる

教員C: 責任感を持っている /
授業を「価値あるもの」として楽しく受講している

OJTのプロセス



LA研修

ファシリテーション研修

	第一回	第二回	第三回	第四回
年月	2010年1月	2010年9月	2011年3月	2011年9月
テーマ	聴き方	合意形成の 促し方	主張の仕方	自己研鑽の 仕方
講師	外部講師			AS

アカデミックスキル研修

	第一回	第二回	第三回
年月	2010年2月	2010年11月	2011年10月
テーマ	プレゼンの技法	クリティカル シンキング	ディスカッション
企画・運営	LA		

LAの活躍

モチベーションの刺激

「教員の働きかけ」 < 「LAの発表を見聞きすること」
「LAのアドバイスを受けること」

LAの評価

LAの熱意・努力	96%
LAの説明の分かりやすさ	87%
LAと教員の連携	93%
円滑なグループワークへの貢献	87%

(2009年春学期受講者アンケート：N=71)

LAの活動の実態

LAたちはどんな活動をしたのか？

～ 2011年春学期のLAたちのReflection Paperのトレース結果から～

受講生支援	平均
グループ内ファシリテーション	35.3%
全体ファシリテーション	28.5%
マンツーマン支援	11.0%
手本を示す	13.3%
授業外アドバイス	5.2%

教員支援	平均
運営支援	40.8%
デザイン	9.1%
待機	24.6%

受講者の声

ラーニング モデル

自分もあんな風に堂々と人前で喋れたらいいなと思いました。

説明がわかりやすかった。
(ディベートなら、お互いの良い部分悪い部分をしっかり指摘してくれた)

LAの方の知識が豊富でとても役に立ちました。

LAの方が色々わかりやすく授業のことを話してくださって、尊敬しました。

先生の言われたことを具体例を出してわかりやすく説明してくれ、授業がとても分かりやすくなりました。

メッセンジャー

ディベートを行うための例を実践してくださり、とても有益でした。

『週刊スタスキ』を発行し、図書館の利用方法とか大学生生活の過ごし方を教えてくれました。

LAも一緒になって授業が行なわれ、私達にアドバイスをしてくれました。

ファシリテーター

LAのアクティビティの広がり

☆「スタスキ新聞」・「LA通信」の発行

☆学部専門科目への出張

☆学内各種行事への参加

☆学外各種行事への参加

LAのアクティビティの広がり ～学内の各種行事への参加～

2010年7月	社会安全学部主催初年次学生向けワークショップ(ファシリテーター)
8月	ワークショップ型情報交換会(自主企画・運営)
11月	学園祭での研究発表
2011年2月	リフレクション合宿(自主企画・運営)
8月	教職課程科目「総合演習」(ファシリテーター)
10月	アカデミックスキル(ディスカッション)研修合宿(自主企画・運営)
10月	アカデミックライティング講座(ファシリテーター)
11月	学園祭での研究発表
2011年11月	アカデミックライティング講座(ファシリテーター)
12月	アカデミックライティング講座(ファシリテーター)

■ 学外の各種行事への参加

出張時期	行事名	場所	内容	参加 LA
2010年4月	関西地区FD連絡協議会	京都大学	ポスターセッション	5人
2011年1月	大学教育改革プログラム 合同フォーラム	東京	ポスターセッション (準備のみ)	6人
2011年5月	関西地区FD連絡協議会	京都大学	ポスターセッション	6人
2011年8月	学生FDサミット	立命館大学	グループワーク プレゼンテーション	3人
2011年9月	i * see 2011	岡山大学	グループワーク プレゼンテーション	5人
2011年11月	学生のWa!!	追手門学院 大学	グループワーク プレゼンテーション	6人



LA Learning Assistant

- 初年次教育科目における能動的学習モデルとしての活動
 - ・グループワークの支援と雰囲気づくり
 - ・プレゼン等の見本の提示
 - ・質問対応
 - ・自身物の経験や学習態度の伝達
 - ・研修プログラムの企画、立案、運営
 - 学内外での出張研修への参加
 - 授業デザインへの関与
 - 活動Tips、ヒント集の作成

私たちはミツバチです!



関西大学教育開発支援センター <http://www.kansai-u.ac.jp/alisp/>

WHAT'S LA?

LAが目指すLAとは?

受講生に対しては 受講生の学びとしての目標を掲げ、
 専任の教員を補完し、授業の進行をサポートし、
 教員の代わりに受講生を支援し、
 教員の意向に沿って授業を進め、
 教員の意向がうまく受講生に伝わらないときに
 LAがケツンとなる

LA=TA

TAとは、授業の進行をサポートし、
 学生と教員の間で、授業の進行をサポートし、
 LAの意向がうまく受講生に伝わらないときに
 LAがケツンとなる

人はなつては、
 成長を続ける
 成長を続ける

受講生のLAC
 に対する権利!!

LA導入におけるメリット

LA導入の留意点

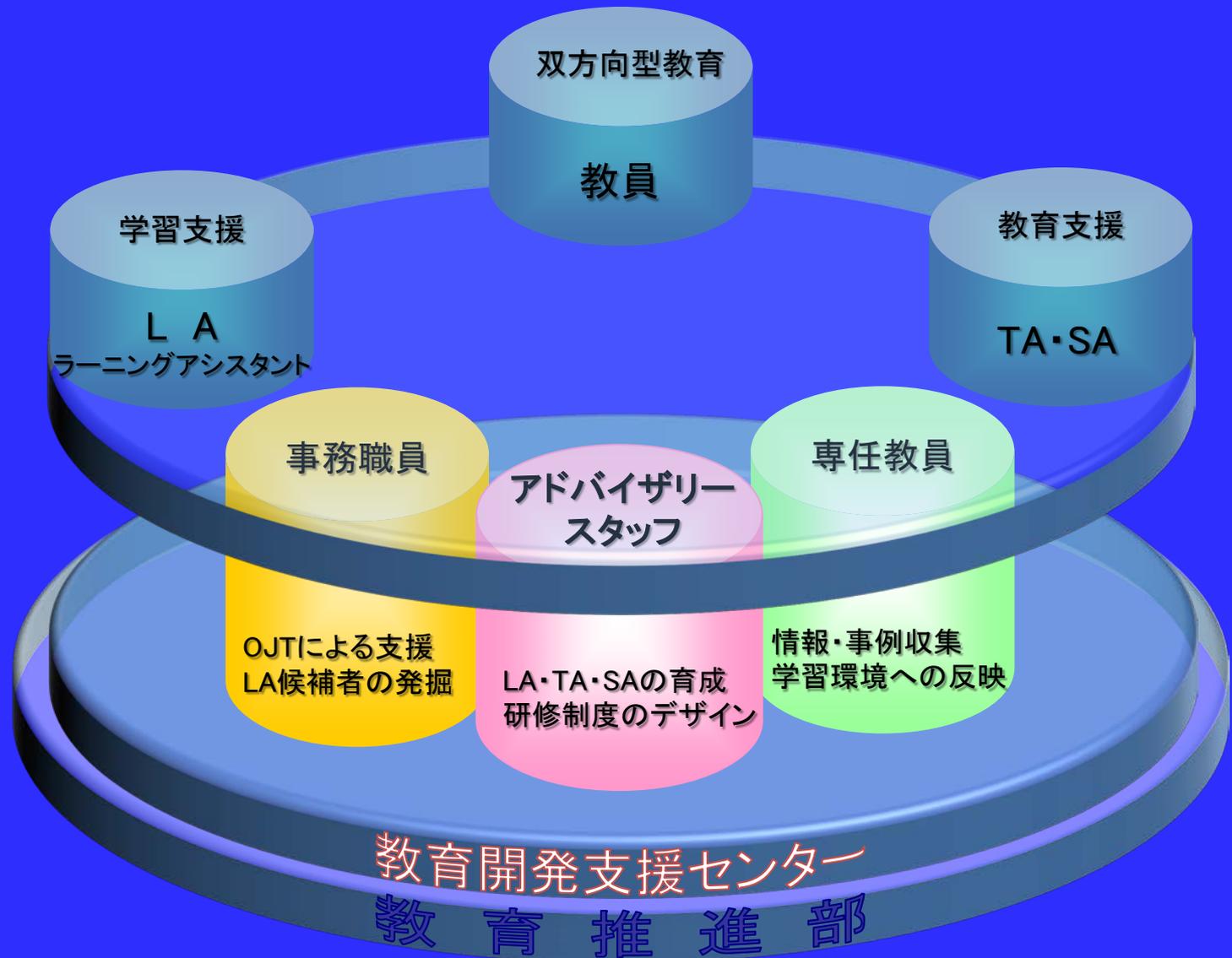
LAの役割

LAの役割

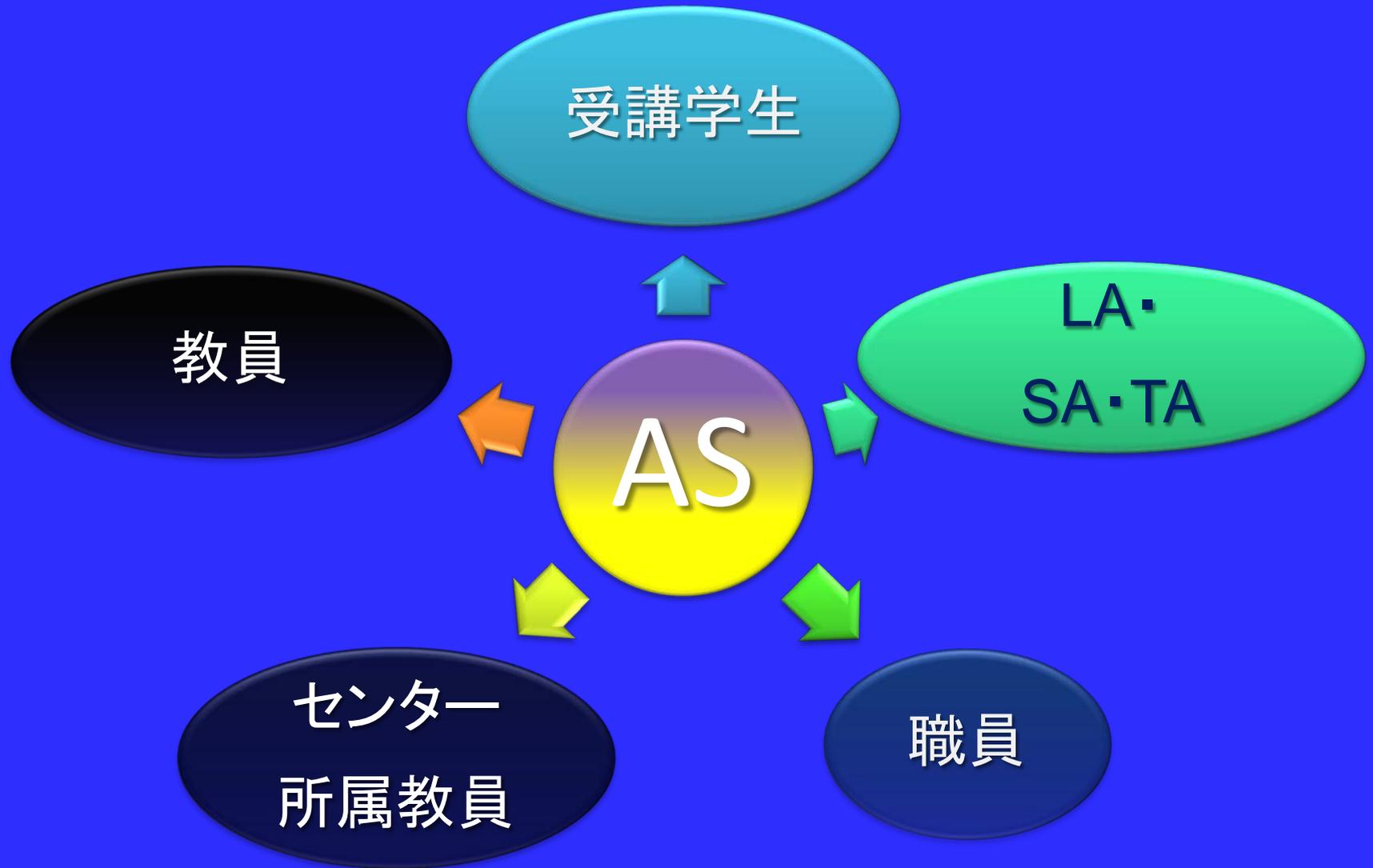
LAの役割



取り組みを支える「三者協働体制」



アドバイザーリースタッフ(AS:院生)の活動



アドバイザーリースタッフ(AS:院生)の活動

- 教員の授業コンサルテーション
- ICT活用支援
- 教員へのヒアリング
- LA養成のための研修プログラムの立案・実施の支援
- LAを活用した授業コンテンツの研究開発
- アクティブ・ラーニングに関する研究
- 各種ワークショップデザイン

本取り組みの経過

	2009年度	2010年度	2011年度
LAの数	12名	38名	47名
LA活用クラス数	10クラス	23クラス	39クラス
LA活用教員数	2名	11名	14名
スタディスキルゼミ クラス数	40クラス	46クラス	54クラス
スタディスキルゼミ 受講者数	663名	704名	1087名

再度

パラダイムシフトの中で「教育力」を考える

- ✓ “How to Teach”からの脱却
 - ✓ “How to Learn”へのまなざし
 - ✓ “What not to Teach”の発想
-
- 学習支援力
 - 学習デザイン力